



里見八犬傳 拾七編 卷四十三



3416
94



13
3416
94

拾七編 子 卷之三 内
四十三

松地 勝善院

南總里見八犬傳第九輯卷之四十二下

東都 曲亭主人編次

第百七十回

神變と操りて伏姫猶子の初陣と華やうを
舊君の謁し信乃父祖の忠義と詳ふ也

是より先、犬塚信乃成、考杉倉武者、直元及大江親兵衛仁孝、新参の
義士、政本、大、全、孝、嗣、並、石、亀、次、因、大、越、鯉、之、向、水、五、十、三、太、枝、獨、鋤、素、吉
須々利、壇、五、郎、二、西、的、寄、舎、五、郎、若、義、士、と、其、徒、さ、う、ち、合、せ、隊、の、者、ヨ、ク、
從、へ、く、十、二、月、八、日、の、下、晡、小、岡、山、の、陣、營、か、へ、る、程、小、義、通、君、の、自、家、勝、軍、の
と、時、東、六、郎、辰、相、が、薦、め、稟、上、よ、り、岡、の、陣、營、か、へ、る、鳥、山、真、人、以、下、老
煉、の、士、卒、一、千、有、餘、と、留、り、成、る、を、既、函、府、臺、の、城、へ、還、ら、せ、ぬ、と、時、
信、乃、若、の、徑、前、所、河、を、舳、渡、り、其、臺、の、城、に、歸、陣、考、隨、即、東、辰、相、小、就、也。

八犬傳九輯卷四十二

寄隊の皆敗績を。迹多落亡せり。政本孝嗣們が義俠勤軍戦功の。大江親兵衛が歸東武功拔萃の。並小姥雪代四郎直塚紀三漕地喜勘太等が武勇の掙あり。又二四的寄舎五郎須々利壇五郎們が忠戦の。又大江親兵衛が意見より神授の靈丹を施して自家の士卒に之敵と見せしめ、忠死者の死を起し生かして降せしめ、請ふ者は是を留め本貫小から去す、願ふ者の饒して放ち遣はる。但一侍我の臣横堀在村新織素仍の信乃射て斃され時土民が其首を捕り齋せ積悪天罰の。又大飼現八を猶殘燼を鎮ん為小權且假名町小在陣の。又真間井樅二郎姥雪代四郎直塚紀三漕地喜勘太の或の施某の頭人を奉り或の施某の裁領とす。猶昨今の戦場小在勤の。今朝も寄隊の三将再戦の時那野猪六十五頭又忽焉と見れ坐く。自家を援けず。寄隊を敗り。出沒不測の。も亦も漏れ

つひまう とも告稟あり。義通感悦あり。の宵正廳小出。信乃親兵衛並直元喬梁政木孝嗣と召寄せ對面ありけり。その他大飼現八田税逸友も尚假名町の陣中小在り。又湘就鳥も古内美容の深瘡を負ふ。臥てあ城内小在り。親兵衛が來る不及いて又神某の奇效より。亟小愈るとも。只古内の。を。衛の義通の従軍な者の瘡を負へ。比皆親兵衛が神某も一人も恙るりけり。又次園太卿三五三太素多吉們。義俠といふ町人又直塚紀三漕地喜勘太の再臣も。又須々利壇五郎二四的寄舎五郎們。他極の野武士も。亦俱小功あり。防禦使及隊長も。必同列る。是等の日大飼現八田税逸友姥雪代四郎等。義通君小拜見の後。小皆刀口出されて功を答へ。ひげの。問話休題。の宵義通君の犬塚信乃大江親兵衛杉倉武者助

繼橋綿四郎政木大全を召よせ。両茶の礼を賜ふ。東六郎執達を
 給侍せし七浦六郎朝夷三弥白濱七郎を侍りけり。當下義通信乃
 親兵衛大全等が軍功を答言さる。うち譚ひゆふ。曩より大飼現八公
 齋藤藤兵衛太郎を生拘りて。當城へあらせし是軍功の首也。今日を
 又寄隊の副將上杉五郎憲房を擒し。岡の陣營へ牽せし。其勲
 功全く現八公の如し似たり。然りければ。信乃が火猪の謀をも寄隊の
 戦車を焼くふあらざる。今日の全勝と云ふべし。有徳れ其軍功を
 正副伯仲せしむんは。是の如く似るべくもあらぬ。嗚呼。三犬士と直元逸友
 等が。閉戦を援んとき。曩より岡山より出陣せり。途に長尾景春の二隊の
 勅兵小撞見して。閉戦難義小及び折思ひする。政木大全が親兵衛と
 交遊の義小仗り。他小立も代えし。同憂同宿の義士次國太卿二

五十三大素吉とら者と共に。其徒六七十を従へ。突然とて援け
 せ。那鋒尖を折けども。尚勝負を分ざり。小幸小親兵衛が京都より
 かの處へ伴當親兵衛新参の義士と俱ふ。數十名残のりて。援て一瞬間小
 那助敵と殺顔し。藪走りして。刺景春の愛子とゆえり。長尾為景と
 擒りて。當城へ進せし。我面をも起し。這大功の信乃現八公。拮捍を
 とひまくの。孰を伯と。孰を仲とせん。只感悦の外あらず。と年々倍て。恰利も
 詞を稱へる。辰相是を執合して。御説畏う。兼りひひぬ。抑三犬才幹
 武勇の左右の。ふもひも。就中大江仁が殺伐攻戦の場。か干て。仁慈の心を
 喪ふ。敵小施某の一條の宋裏の仁小似れども。武をひて人を征する者。を
 威勢必長久らざる。徳をひて人を征する者。十世の後。ま川流ある。淳
 和せむと云ふ。則是館の御本意を親兵衛がよく仕りぬ。と答言る。親兵

衛推林示めて。御家老仁を差殺るまゝひて。館の御盛徳ハ格別之臣等ハ
今日まで今日兼り。御軍令に従ふの。細人の威勢あるハ敢忌憚る事
懲りて新小做まふあらむ争ひ已と死るるべしと思ふるの所なりと辭
ふを信乃ハ諾るひく。其言愚意も相似し。譬言ハ那靈猪の如死ハ牙ハ焦
火を結着しれハ戦車を焼死ハ然るるとも。其折一頭も火ハ死
又敵も捷殺され征方も知ざるけるハ亦再戦の折ハ頭れ出る。自家を
援けて敵の騎馬を馳けし又馳破りて撥消ま如く見えざるハ意ハ
この奇事ハ則當家を守りぬ伏姫神の真助も。猛死獸のハ
信乃様を做さんとあらんや。畢竟我君年來の御善政の餘福ハ臣等
功德なるを御褒賞の倒也。當りくつと謝するを義通君推禁を
信乃其靈猪のりも又一層の奇事なり。六郎具ハ告げやと仰辰相

阿と心て膝を找め談を。犬塚大江自餘の人々も听ねか。御前郎
君岡山より御歸城の談定り。既ハ生んとあ程ハ怪む。一箇の野猪
大に憤ハ。一個の武者の鎧の表帯ハ牙ハ引掛け背ハ載て走ると
飛鳥の如く岡ハ登り。郎君の御馬前ハ。伴の衆兵吐嗟と騷
ん。防ハ林示んとせ。程ハ野猪ハ背ハ武者を控と振隊半て走り往
方ハ知ざるハ。未曾有の奇事。則雜兵ハ件の武者を
杖起さ。見ら。大將口ハ人る。戎衣都て綺羅穿る。既ハ半
生羊死。在り。其ハ與ハ勦せ。且其姓名來歴を鞠問る。其武
者ハ。寄隊の大將也。辭我の左兵衛督成氏之御前自家
敗軍の折鈍も暴猪ハ馬を仆されて。身も馳られたと思ひ。あハ
未だ覺見。喜。這里ハ敵陣。命運の傾く所。今ハ免る。路

あらむ。左も右もせられた。と陳ドめり。嗚呼。則答ふ。御推量の如く。這
 地方の岡山の陣営。目今義通歸城の折。御心易く思召ね。寡君
 義成の仁人。父祖の舊交。御命及ぶ。先國府基の
 城へ俱し。卒ぬ。慰め。儘馬の枝。棄せ。士卒。獨那君
 せ。當城内へ俱して。一室。屏籠。番士を置。守らせ。獨那君
 の。當城内へ。當城内へ。憲房主あり。為景孺
 子あり。又那。藤盛実あり。も。長る。各。檻室と異。衛士
 多く。附置。城内。實客。是。和殿。柄。愛。あ。と
 告る。感。親。兵。衛。直元。且。呆。且。答。原
 來。折。成。氏。主。靈。野。猪。不。耻。岡。山。へ。去。れ。後。臣。等。の。闘。戦
 稍。克。敵。を。漏。さ。と。思。ひ。の。然。る。光。景。を。見。ざ。れ。ば。知。る。と。も。く。と

むら。悟。る。由。も。當。下。信。乃。の。謹。く。辰。相。答。る。目。今。創。て。美
 那。靈。猪。の。掙。た。実。小。奇。中。の。一。大。奇。事。あ。て。人。の。よ。く。做。ら。ぬ。あ。初
 臣。等。の。前。所。河。を。う。ち。渡。して。寄。隊。を。送。り。戦。ひ。も。成。氏。主。の。一。隊。を
 直元。逸。友。を。の。相。向。せ。臣。等。の。一。つ。の。前。を。飛。し。鋒。を。交。へ。其。故
 如何。と。那。君。の。臣。等。が。大。父。大。塚。匠。作。の。主。筋。あ。り。父。番。作。も。當。初。其
 餘。祿。と。の。成長。れ。り。又。義。兄。弟。犬。飼。現。八。が。為。是。現。在。の。故。主。今。の
 恩。仇。地。を。易。く。雙。言。敵。の。思。ひ。と。せ。る。と。も。只。君。命。を。の。倡。て。鋒。を。交。へ。前。を
 飛。し。戦。ひ。克。て。或。の。生。拘。り。或。の。其。首。を。捕。ら。人。其。是。を。何。と。ら。ん。君。子。の
 忍。び。さ。り。所。る。れ。正。人。を。憎。む。べ。し。の。故。今。日。の。再。戦。も。臣。等。の。真。實。間。井
 秋季。を。ね。り。頭。定。主。と。挑。し。戦。ひ。現。八。も。亦。繼。橋。喬。梁。と。副。と。て。憲。房
 主。と。戦。ふ。却。成。氏。主。の。一。隊。を。杉。倉。と。田。税。を。指。向。く。二。百。俱。戦。克

去の靈猪の援ふもてり。介るふかの折直元逸友兩個を成氏主と檢ふ
 せむ臣等が做まあらねども臣等の防御の正使や。其軍配の外るるを則
 臣等が隊配されば五十歩百歩の差池あるの。臣等が檢ふ做せり同士の
 故の神明地靈那靈猪と成氏主を駈馳せて岡山を御陣へ餽り
 郎君の御ふ入れ。這回郎君初陣の御も柄の做されし臣等の故主を
 檢ふまると云悪名を召むるやと今とを悟れ其奇其妙。凡智小量知ら
 ば。必是伏姫神の神通廣大めて物不馮の真助不疑ひるべし。と思ふ
 由疎小ひつめと心の誠うち出さ言細やふ解論せば義通感悦ひるもあは
 況や辰相直元孝嗣等の説れて思旋らせ信乃が誠心始と忘れを裏中
 飽き情多や。那君も怨るる理義分明る高論の人の惑ひを醒
 さふ足れり。あも學問の力あそと感嘆されば親兵衛も有理々々然んと

點頭。危言とを稱へけ。然が義通凱陣の後ふの義を嚴君義成
 主の告ぬひ。義成則箭祈河原を摩利支天神へ堂料五十貫
 文を寄布表ぬひ。且其堂内伏姫神の神號木主を置くこと許を
 べ。と制度せらる。是ふも。摩利支天の別當西妙並初那野猪六十
 五頭と虚舟より援陟して養置ける莊客們米錢許多賜り。皆因
 恩を拜戴し。飲さるるけり。あも是後の話と却説ふの宵函府基
 る城内。信乃等が云云と議し。稟を程小。小夜深し。親兵衛則
 計の稟し。政木大全苦戦の疲労あらん疾息室へ退り。睡ふ就べ
 身。身の暇と賜ひ。案内者等孝嗣と俱して外面へ退出けり。登時信
 乃の又辰相等談まる。あも地の大敵皆散落して。稍静悄悄垂と
 明日の風め。急遽脚の使者。洲崎の御陣へあを。先ふの義を告まる

て且那里の御安危と伺ひなむらむらあべとむらむら但一仍徳口を防禦使莊
 小文五吾のいさるや先他考ふ仰合されど不便をゆめと議されど亦
 親兵衛も俱ふのや臣考の京師より御使を果し來るのまご稻村へ進
 されども御高の信乃よ傳達せられて防禦使たるたの台命を奉り且御
 大刀さへ賜りしが寄敵あゝの地お在らん程の閉戦を援けなむらべ寄敵
 既お退る猶當城お掩留せざる似く不忠るべくやとの議論を辰
 相うちめて二天士の意見見其理あり然るべ行徳へ振照俱教二を遣し
 那里の安危と向まべ又洲崎の御陣へ継橋綿四郎をまあせてあゝの地の
 勝軍を注進せん大江生へ從來の親兵衛二名をとり歸東の義を生口な
 して寄敵弥在らむ做るその折稻村へ參るともいさむ遲延おあむらべ
 と議されど二天士の意見儘せ直元と共侶お退りて連署の注進状を

筆東お寫せむら既わして曉天ふらし時候振照俱教二弘經の義通君れ
 命およりて親兵衛名を領て仍徳口を犬川大田が陣營お赴けし那里
 より莊小文五吾の使とて満呂再太郎信重と安西就介景重が隊の
 兵をお快船おうち乗らむ暴河を洩り來て犬川大田が勝軍の告文
 と信乃現八へ與る書状を呈覽ま是ふよりて這再太郎の満呂復五郎
 重時の養嗣たる者らも又就介の安西出來が獨子たるはよりも
 知られて那里の閉戦お莊小文五吾の千普景自胤と大石憲重原胤久等
 擒おあむらむ胤久の深瘻を命危たりも告文お載る且再太郎就介
 が口状お見んければ東辰相鉄ひ巻言て這兩個の少年を見參お入を
 去ら義通則再太郎就介お牽出物を賜りて則這里よりも方僅
 振照弘經を遣せらむ若們が還りらむる以前お這方のの知らるべ只

大の上の館へ注進をいそぐと仰合させし。身の暇を賜ひけり。その時大江
 親兵衛の那里の刀瘡見よと嘆く。則神茶一盒を井社小文五口
 餽り遣せし。那隊の士卒の重瘡の如く原胤久の如く必死の命死せしと
 泣く。倭而継橋綿四郎喬梁と大江親兵衛が野兵毎の朝安房へ
 急遽脚の使を来りし。洲崎の陣營赴けり。有徳り程五十二太素
 る吉の次團太卿三郎と俱不見参の礼果て西園河原へ退りしと請ひて義
 通固く留めぬ。他門の只氣を使い任使を磨くのを。武士とあつを
 欲りせむ。熟する活業もいへ。枉く身の暇を賜るべし。願ひ稟まより。親兵
 衛孝嗣も是を林の樹るたよと嘆えし。則五十二太素も士目三六七
 十名多當坐の賞禄と多く賜りし。異日稲村より刀れる。必まあるべし。
 と仰らる。その時亦孝嗣も意衷を陳て既大江代らま欲りし。志の

果し。今の大江のからきて且寄敵落亡され。その地は所用る。身小
 る。向水們と共侶も退るべし。その親兵衛何で。饒志義通君
 も其言を傳へて放ちぬ。もあつ。管待の厚多ければ。孝嗣の今も
 辭ひ稟さん。さまが。只得次團太卿三郎と俱。當城に留り。介
 程小犬飼現八も。寄隊敗軍の往方。穿鑿果して。田税逸友と俱。小
 假名町を退陣。あて當城へ。来る程。前河を思ひける。水路の
 敵將扇谷式部少輔朝寧の水死を。甦生らせ。更。橋小。ぬ。う。の
 既。上。小。見。え。る。如。し。現。八。及。力。助。逸。友。も。敵。將。足。利。成。氏。を。靈。野
 猪。少。駈。齋。廟。して。義。通。君。の。初。陣。の。華。お。做。せ。し。公。奇。談。胆。を。渡。し。相
 賀。して。逸。友。と。共。侶。小。義。通。君。小。見。参。ま。又。真。間。井。樅。二。郎。姥。雪。代。四
 郎。直。塚。紀。三。六。漕。地。喜。勘。太。右。衛。門。神。茶。施。行。の。事。果。て。その。日。の。暁。自。

かりまふければ親兵衛の明日の早天代四郎以下の母と孝嗣次園太
 卿之寄舎五郎壇五郎。その黨さ相伴ひく。安房へ還る欲は信
 遠に折られ親兵衛が京師よりあり。又歸路の義通君も
 辰相も告る不具る所あり。事小觸る者あり然るも信乃
 多がつる隨不義通君不告稟せし人咸これを知らる。奇異小驚
 武勇と譽てゆく茶話。あまあける。問話休題。介程。信乃親兵衛の
 敵といへも生口の敗將隊長を侮り卑ゆる義通君不告上て其款侍
 等困る。敬言固の士卒と傲めく。を礼するを饒さず。現八も共侶
 三四室る。園固を看輪り。憲房為景盛実名と問慰る。不憲房
 為景と羞く頭を拾けぬ。衣うち被せ。陽睡して居り。又成氏身邊
 造る。是も亦敬言固の士卒うち圍れ。燈燭の下る。裨の上坐して

又さ頭を低く在り。當下信乃現八親兵衛の鎖を衛子等不啓せ。俱
 檻室の内お杖と入り。額衝は拜して安否と語へ。成氏の驚はる。と解
 急礼を返して和殿等。是誰と問ふ。問れて信乃の膝を找めて敬
 答る。早も忘れさる。飲臣等。則生人る。君が兄不御坐せ。春王君
 安王君の小傳る。ける。武藏園豊嶋郡の人民大塚直作。三成が孫大塚
 番作。一成が獨子。大塚信乃。金成考。考てひ。信乃言故。おれ
 往時嘉吉の擾乱。結城十萬の義兵。三輪を歴く。竟おろ折は勢
 竭。兩公達の敵の為。不俘囚と做り。玉ひ折臣等。大父三成を殺す。出
 猶戦。陣殺をせ。けり。と口碑。お修へ。當時番作十八歳。父の遺訓
 重圍を殺脱。像見の名。刀村雨丸を腰。帯り。兩公達の去向を。惜地。跟
 まつ。美濃の垂井。に至る程。痛く。兩公達の。金蓮寺。御事。

一番作の其御終焉を見るに堪むと奮然と跳り出づ創るの武士と只
 一刀の所行して両公達の御首級を奪奪命を辛くして其勢の敵を殺
 脱る信濃路の末に路傍の道場へ両公達の御首級を情地不
 瘞めし身のぬ介る不当晚番作の宿を投り草庵をくも東と喚做ま
 少女の逢ぬ開の結髪友の妻やと其父も亦結城を匠作と俱陣歿
 母を早く世を去りて所寓る身今ゆふ天縁の熟き所遂に送捨
 る不忍心は則是臣等が母を折らう父の金蓮寺を受る痛疾不堪夫
 流麻ふ赴に湯治して稍刀瘡の愈えれども是より行歩自由なれ夫
 婦相推して辛くして故郷を武藏の大塚かの末の是より氏を改め大
 塚と喚做して兵法武藝を御黨に教へて年と歴る隨小臣等を生ひ
 ぬ幸るは只是のころで母の臣等が六七歳の比舊病重りて身故りぬ

父も年未及病有り一則父の姉婿なる大塚基六と喚做せ細人を
 則大塚の御の莊官なり其心術便僻なり且我父の姉龜の條も同惡なり
 憑一々を父が年未秘藏せる村雨丸の名刀を言ふ假托け術どりく奪
 命を欲せしと父の猜を防げども既中々年漸々病病且父身
 逼るゆゆ命長うらと覚期ある一夕臣等が父祖の忠義と村雨の大
 刀の傳來を説示ま右の如く汝成長りし時澁我の御所へ参上りて這
 名刀を献りて且其大刀の傳來と父祖の忠義を述べ上りて仕官を願ひな
 れと教る詞の露るる光玉るを刃を抜く腹極所を俯ゆるぬの時臣
 等も十二歳親の送訓に従ふる馬心くぬ伯母丈婦許養まら堪
 がた艱苦を忍ぶ年々麻生身の稍成長りて今茲より六稔以前文明
 十年夏月の時候臣等澁我を赴き隨即御所へ伺候す村雨の大



ちまお 刀を進らぬ。猶思慮足らざりて。其名刀ハ牙人ハ拔易られしと悟らぬ。

 然ハ横堀在村ガ質物人と看破りて一言半句ハ分説を聴き反々

 臣等ハ隣國の間謀見るべしと。猛ハ居マの力士ハ課々捕捕せんと

 欲せし。臣等勢ハ已工をぬぎ緝捕の力士を殺拂ひて芳流閣と喚做

 高樓の屋上の攀登りて脱れ去り。欲せし程ハ御内の力士大飼見ハ

 登り來ぬる組打して両失脚。滾落々閣下。河邊不在りける。船ハ

 受られ。纜断離れて身ハ氣絶して在り。程ハ急湍ハ推流さし。行

 徳の浦ハ寓り。當日地方の豪傑大田小文吾親子ハ救れ。死ざる

 と。ゆれども。泝我。受る。刀傷の破傷風ハ做り。身ハ病臥。

 古那屋在り。古那屋ハ則小文吾の親文五兵衛ガ歇店の跡。折々横堀

 在村。沙汰。御内の侍新織帆。大支素。臣等ハ緝捕の頭人を奉

了。親兵を多く従へて。仍徳へ。突撃。六臣等ハ窮厄逼迫。免

 るべし。あらざる。小文吾ガ妹。夫。這果。大江親兵衛ガ父。ける。義

 士山林房ハ。其妻共。侶。身を殺。其鮮血を。臣等ガ。疾ハ。

 奇。某の。效。行。心。我。破。傷。風。亟。愈。て。身。ハ。口。ハ。恙。る。死。と。ゆ。る。の。こ。

 ら。房ハ。面。影。の。よ。臣。等。ハ。肖。る。小。文。吾。則。其。首。を。新。織。帆

 大支を。欺。還。て。再。厄。遂。ハ。解。け。義。兄。弟。と。共。侶。ハ。推。歴。浮。浪。六。个

 年。ハ。麻。止。程。ハ。臣。等。ハ。同。因。果。の。義。兄。弟。俱。ハ。大。を。く。廟。字。ハ。做。せる。者。ハ

 人。る。ハ。知。れ。且。未。生。以。前。より。里。見。殿。ハ。宿。因。の。家。臣。ハ。死。す。

 悟。れ。も。其。時。至。り。今。茲。の。夏。四。月。の。時。候。君。臣。の。天。縁。竟。ハ。熟

 多。皆。共。侶。ハ。安。房。ハ。徴。れ。籠。遇。特。ハ。法。を。修。而。這。回。の。閉。戦。ハ。臣。等。と

 大。飼。現。ハ。義。通。の。隊。ハ。隸。ら。れ。て。則。這。地。の。防。御。使。ハ。聊。螳。臂。と。抗。

より連勝して這田地に至れり。遮莫微功。誇んとて家の賤譜を宣示さる。あつちの父祖の忠魂義胆と御聽入れんとて。又辯及びひに其將六日。昔蒲るべく。十日の菊ふ似れども。折をりて先人の志を告まらる。不孝を思ひより。言憚りる。心ひと心の誠うち出さ言爽。小説果て。後方と見え入る。身を退く。坐を譲れば。現八やと。膝を找めて。成氏主の向ひ。額衝て且告る。臣等。素是微賤の小卒。信。瀨。立。ゆ。御視。徹を饒されん。然るを咫尺をり。名生る。鳥。瀨。の。本。貫。上。總。武藏。多。豊。嶋。大。塚。の。氓。糠。介。が。獨。子。り。と。襁。褓。の。中。より。御。内。の。走。卒。犬。飼。見。兵。衛。不。養。れ。て。藩。我。の。藩。中。で。成。長。り。ひ。養。父。没。して。卑。職。を。嗣。ぐ。則。犬。飼。見。八。と。喚。れ。一。重。要。時。の。程。を。今。を。里。見。の。防。御。使。る。犬。飼。現。八。金。碗。信。道。を。以。入。臣。等。貴。藩。在。り。日。

兵員を由卑職れども君仕へ私る。忠義を盡す。至りて。禄の。少。と。職。の。尊。卑。不。依。る。べ。く。も。い。は。是。を。り。初。を。師。を。擇。む。技。を。勵。む。兵。法。七。書。弓。馬。劍。術。緝。捕。白。打。不。至。る。を。學。び。む。と。い。ふ。然。り。けれども。御内の家宰横堀史在村の能と媚を賢を奉はむ。反て臣等。媚を求る。とるを憎。職を轉。て。獄吏。不。做。ぬ。臣。等。の。牢。獄。の。小。吏。と。い。ふ。其。情。願。ふ。あ。ら。ざ。れ。ば。屢。辭。ひ。ゆ。り。と。在。村。不。敬。の。罪。と。誣。て。臣。等。を。牢。獄。に。繫。垂。さ。る。然。而。一。日。大。塚。信。乃。と。緝。捕。の。力。士。們。芳。流。閣。上。の。挑。を。負。て。死。を。致。さ。者。ま。り。と。在。村。則。計。ひ。京。上。の。臣。等。を。獄。舎。より。饒。し。む。件。の。緝。捕。を。課。し。六。臣。等。則。芳。流。閣。上。の。檮。本。登。り。組。打。の。顛。未。目。今。信。乃。が。口。狀。不。具。然。に。折。氣。絶。して。勉。行。德。へ。流。れ。ま。り。我。の。復。り。て。由。來。と。問。ふ。信。乃。の。疎。忽。の。失。あ。る。と。擲。捕。ら。る。死。罪。不。あ。る。且。臣。等。が。實。父。糠。

其の則信乃と同郷也。信乃を紹興の簡も。奇遇ハ又只これのまゝ也。
信乃と臣等ハ宿因あり。異姓の弟兄と成る。微ハ迷ハ身の内ハ疾あり。
形牡丹の花ハ似たり。又感得の靈玉あり。小文五口と親兵衛も同因因果の
疾あり。玉あり。八人ハるべ死を中。其の日の時。小文五口と四人相逢。其を
信乃ハ信乃ハ罪を犯者。必捕縛るべし。然バとて臣等只一人阿容
阿容とて。許我へ還ら。又其罪を誡せられ。必在村がら死ん進退
維谷の如し。故ハ信乃と俱ハ躲れて。約徳の古那屋ハ居り。是より浮浪
六稔と歷す。義兄弟等と共に召れて。安房へ参り。其も亦信乃が口
状ハ具へ。薄情なる君ハ只在村が。奸虐私論の証言との。信容させぬを
り。今も猶信乃と臣等と憎しとの。思召す。信乃と臣等が意。哀ハ
まゝを非如恩仇地を易く。今君命ハ依るとの。昔君故王と敵と

逆ハ箭を飛し。鋒を舞し。死と争ハ本意ハあらず。故ハ始より君が一隊の陣
ハ杉倉武者助直元田。税力助。逸友を。指向日。信乃と臣等。鎮定親子。此隊
と戦ハ。不料ハ。靈猪の援あり。君ハ敗軍の時。臨毛。駈く。背あり。駈せ。我ハ
義通の陣。營ハ致せ。ハ神明佛陀の冥助あり。信乃と臣等。始と志。胡馬の
北風。燕鵲。南枝の心を。監とみ。ひけん。一大奇事。あて。ひけん。成氏ハ。連
て。額ハ。汗。其の。も。答。及。び。り。信乃ハ。慰。め。君。知。召。れ。む。御。横。堀。在
村。と。新。織。素。紗。の。御。陣。の。敗。と。見。え。る。二。騎。連。立。て。落。亡。せ。と。底。不。知。野。の。邊。也。
臣等。趕。蒐。く。射。て。斃。然。然。る。と。地方。の。莊。客。其。首。と。斬。り。て。來。て。實。檢。入。れ。ハ
以。官。君。這。回。の。軍。令。ハ。只。當。の。敵。と。數。と。許。し。て。敵。の。首。と。捕。る。者。と。功。と。是。
然。と。在。村。素。紗。の。俱。死。首。を。土。民。ハ。捕。ら。れ。軍。門。ハ。梟。ら。れ。八。年。來。君。を。忍
て。賢。を。害。し。民。を。虐。は。く。家。と。富。なる。天。罰。を。受。け。り。と。解。れ。て。成。氏。嘆。息。す。

いづく顛末皆金玉不異るに我不明やて始より和郎若の敗良英才を思
ふ三番示て鄰國の主不傲しる悔は楚懷の憂不同鳥の頭は白くも生て尚我
へ還りかたは覺期に既にお丸ゆると答て嗟歎お堪さけり登時大江親兵衛に我
をかく拜してのちを殿さるる歎せぬひそ臣若も里見の防禦使用する大江親兵
衛仁おゆり言自負ふ似てはふも寡君義成が仁義の家風相従ふ我門は
惻隱忠恕辭讓是非のゆひあふとゆひのる。あまのりく昨今の閉戦は自家の
仇を敵の士卒の或は深瘡を負ひ或は戦死せし者比自是其君の為人命を惜ぬ
忠臣の豈是を憐むらんか。あまの故臣若が秘藏の神茶を施ゆし君が隊の兵と
えらる料草七郎望見一郎あは他寄隊の士卒の死を救ふ其還りと願ふ者も
其主不復しあは敵の士卒まをかくの如し君お於て何うあらん義成安房へ迎まると
舊交の情ゆひ久と言叮寧お慰れ信乃現八も復共侶お臣若君を辱めんと

父祖の上さうち出て云々と稟をあつたは只其忠義の心操を知せまると思ふの
又てを見参まげれと告別多外面うち連立を退せり。あまの時左右の檻室に
在る憲房為景盛実多ゆへ守護の士卒お至るも。這天士の忠孝博愛
始と推て故を忘れぬ真面目は是るゆりとも感服せまるとゆひ。悠而大江親
兵衛の宵東辰相お意哀と告て義通君お身の暇と請ふ程お真開弁秋
季親雪代四郎直塚紀三六漕地喜勘太の施茶の果てらへ來おけり。あまの親
兵衛の次の日早天お信乃現八並お直元逸友以下の隊長諸頭人お相別れて。親
雪代四郎直塚紀三六漕地喜勘太の伴當夥兵及政本孝嗣石龜次園太
越卿三四的寄舎五郎須々利壇五郎と其隊の兵六十餘名おとて名馬青海
波おちら踏りつ洲崎の陣にお赴き。昨日朝洲崎の夥兵両三名お参りて歸
東の義を注進まなり。あまの洲崎の澳の勝軍既お朝寧主の口中ゆへお尋なれ

今此のいそぎを要する。今番路を食らひ先大川大田と訪そ那里の勝軍の事の
 光景とよく尋問以て知りて兩館へ京上へその日の徳へ立寄りの然るがの時莊
 小文吾の猶今井河原の柵に在り昨日有持備村朝経と二の精兵を測嶺陣
 へ急遽脚の使ふち起せ。閉戦全勝の夏並生口の交名を注進せける。且石濱の
 千葉の老黨士卒は自瀬橋のぬと少知りて驚愕に怖る。と大々を然て。這狐
 城を久く抱か。了そ。主君の妻妾諸臣の宅眷と資財什物。及名筋執業を城を
 棄てて落七け。を。風。河原の柵に告る者あり。莊小文吾ち笑ひて我ち捉ま
 ぬ。ぬ。井。儘。野。武。士。山。賊。の。據。る。と。あ。ら。ん。と。隨。即。登。桐。山。八。郎。良。千。九。隊。兵
 一千二百と分ち授けて亟に石濱へ遣て件の城を守せけり有持。一程。今日。大江
 親兵衛。雪代四郎。政木。大金。石。龜。次。團。大。越。鯉。三。新。附。の。野。武。三。四。的。寄。舎。五
 郎。須。利。壇。五。郎。們。を。相。伴。以。て。國。府。臺。より。東。へ。移。れ。送。の。鉄。の。籠。を。あ。ら。は。し。大
 郎。須。利。壇。五。郎。們。を。相。伴。以。て。國。府。臺。より。東。へ。移。れ。送。の。鉄。の。籠。を。あ。ら。は。し。大

廳小賓主の席と設け月屬會話の時移る。覺満呂復五郎再太郎安西
 就大樟村主。這席未ふ列り。俱欽びを盡めり。當下莊小文吾。次團大
 ち對ひ。曩小稲戸津衛が好意。片見の艱処を脱れ。時足下の宿野へ
 して報知せむ。思ひ。人。知。れ。ん。と。怕。れ。果。さ。り。た。と。ち。勸。解。れ。又。次。團。大。郎
 三の毛野が智計の帮助。再生。欽び。便宜。あり。今。番。を。時。至。り
 安房へ赴くと云。欽びを告ると。又莊小文吾以下の毎の孝嗣の人と為る。最慕
 ち。思。ひ。其。管。待。大。江。姥。雪。子。親。兵。衛。昨。日。餓。れ。神。茶。の。原
 胤久の深癢。他。刀。瘡。兒。小。用。以。て。即。効。あ。ま。と。の。者。を。但。惜。む。一。戰。死
 せ。敵。自。家。の。士。卒。の。骸。骨。埋。め。一。六。神。茶。を。至。る。と。も。其。死。を。起。す
 こと。何。ぞ。か。幸。な。意。余。比。自。是。命。數。歎。然。心。業。報。る。と。云。主。客。の
 相譚。い。満。る。時。滿。呂。再。大。郎。と。安。西。就。大。郎。酌。を。執。て。盃。を。勸。る。程。日。景。既。敵。に



去。親兵衛急不別を告て且同伴の衆人をのそが。青海波の馬を牽
 せて今井河今又渡を船果て上總路投て立止けり然親兵衛の日の進止
 する待ら安房の在る君と親とを等閑して只其情義の故とて。這頭小路草成
 喫けり相応らむと思ふ者もあらん井の人を知らず蓋這陸地二所所の閉戦一
 箇も軍監も。親兵衛の情地も東辰相と商量あり且義通君の命を禀て其
 職と兼ふ異日軍功を媚む者の証言と防んと故意徳へ立よる然ハ
 この小集の私の所以の事を亦是公事なり既に。陸地二ヶ所の軍談の
 ぞ小説盡し。是より又洲崎の澳る水戦の甚麼を分教あり。赤壁阿
 瞞勢勿負。燒殫艦艦有周郎。を前板阪東將帥の像替の猶詳不
 知ま欲さば又巻を改め且下回小説分るを聴ねかし。

南總里見八代傳第九輯卷之四十二下終

曲亭翁口授編 一陽齋後豊國画

新局玉石童子訓

上帙五卷 既發市
下帙五卷

此書ハ曩小曲亭翁著編近世説美少年録と標題し初編
 上り二編小至る迄發販し普世評高し今昔無比の珍書因て雲
 看官後輯の發市と俟ゆるも故有て翁稿と脱賜らば爰おきて第三
 輯より下四輯と嗣支のる介る漸く刊行の時と得て今年稿本成及
 中絶既小年と経て最大う後れりて書名と玉石童子訓と換らるる
 然れ本傳の美少年録の第四輯あり是より不怠編と嗣全部の
 結局不至る支近お在り巻と緋の題名のと見聞し事の
 譯と識めざる主顧君子の止口なる前編と印らる高評を賜らる
 本房の幸甚しからんと

江戸大傳馬町三丁目 文溪堂丁子屋平兵衛謹白

先述の書ハ一巻のみのり
のり巻として求むるべし

